

経験からの学習プロセスを検証する

行為内リフレクションと行為に関するリフレクションの実験的検討

今城志保・藤村直子・佐藤裕子（リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所）

キーワード：リフレクション，経験学習，動機付け

背景

働く環境が大きく変化する中で、働く個人は学び続けることが必要だといわれている(内閣府, 2018)。組織で働く人にとって、多くの学びは仕事の経験から得られる。Kolb(1984)をはじめとして経験からの学びに関する理論は多いものの、特に成人が経験からどう学ぶかの心理的プロセスは、十分理解されているとはいえない。また学びを促進する方法に関する研究も不十分である。そこで本研究では、経験からの学びを促進すると考えられている 2 種類のリフレクション (reflection on action ROA; reflection in action RIA; Schön, 1983) を操作することで、これらが学びに及ぼす影響を、実験により検討した。

方法

漢字組み合わせクイズ(例:「耳 門」を見て「聞」と解答すれば正答)への取り組みに際し、解答のコツの記述(ROA)と、コツの記述があることの予告(RIA)を操作した実験(2×2)を行った。

<被験者> 22歳~34歳の会社勤務の男女を対象にインターネットによる事前調査にて、認知欲求が極端に低い、あるいはクイズを解く頻度がほぼ毎日であるものを除外した後、指定日時に参加可能な155名からランダムにA~D群に割り当てコールし、参加可能な者から86名を対象者とした(各群22、あるいは21名)。

<手続き> 実験は条件ごとに集合で行った。例題2問を提示した後、前後半10問ずつの漢字組み合わせクイズを、問題提示20秒、解答5秒で行った。前半は問題ごとに正解を提示(5秒)、後半は10問解答後に正解を一括提示(1分)とした。

<実験条件> 解答のコツの途中記述は、前半と後半の間で行い(AB群)、対照群(CD群)は普段の仕事での持論を記述した。後半解答後に、ABは仕事での持論を、CDは解答のコツを記述した。いずれも記述時間は4分である。また、コツ記述があることの予告は、前半開始前に行った(AC)。

結果と考察

2種類の結果変数を用いる。1つ目は前後正答差(前半の正答数-後半の正答数)で、後半になるにつれて

問題が難しくなることから、どの程度成績が低下するかを見るものである。もうひとつが後前無答差(後半の無答数-前半の無答数)で、後半になって回答がまったく記入されていない数がどの程度増えるかを見た。

前後正答差を用いた分析では、途中記述群(AB)と、普段の仕事での持論を記入した対照群(CD)には有意な差があり($F=6.33, p<.05$)、前者のほうが後半の成績の低下が大きかった(それぞれ 3.24, 2.07)。後前無答差を用いた分析では、途中記述と予告操作の間に交互作用があり($F=7.58, p<.01$)、予告があつて途中記述がない群(C)で、他の群と異なり、無答数が後半増えなかった(Figure 1)。

途中記述群のほうが後半の成績の伸びが悪かったことから、途中で ROA は学びを阻害する予想に反する結果になった。ただし、最後に記述されたコツと比べて、途中記述のほうが記述の文字数が有意に少なかった(それぞれ 67.2, 53.1)。途中記述のタイミングが早すぎた可能性もあり、ROA の効果については引き続き検討が必要である。一方、後半問題が難化しても C 群で無答が増えなかったことから、RIA は課題に対する動機付けを高める効果が示唆された。RIA に成果向上の効果があるかについては今後の検討課題である。

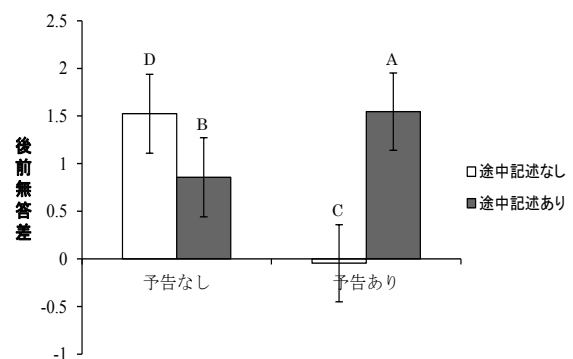


Figure 1. リフレクションが後前無答差に及ぼす影響

引用文献

内閣府 (2018). 年次経済報告書第 2 章 / Kolb, D. (1984). *Experiential learning as the science of learning and development.* / Schön, D. A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.*